

立原道造に対しての野村英夫

大 森 郁之助

I

立原道造はその公刊誌への詩篇発表の最初が第二次『四季』二号（昭9・12）であり、そして『四季』隆昌のさ中、十四年三月に早世した。つまり詩人としての立原の存在は、少なくとも時間的には完全に第二次『四季』の中に収まっている。その点は『四季』派最後の詩人（猿渡重達、昭54・10沖積舎刊『野村英夫』の章題）とさえ称される野村英夫とも、はつきりと異なっている。

野村も又『四季』の中で生まれ育った詩人といっても過言ではない（昭54・3旺文社刊『現代詩の解釈と鑑賞辞典』、この項田中清光）とされるが、それと同時に「立原道造に兄事していた」故をもつて「往々読者に立原にそっくりの模倣的な亜流の詩を書いていたように思われがちであ」り（昭43・5明治書院刊『読解講座現代詩の鑑賞』3、この項小川和佑）、その独自性を説く場合も、「立原的な世界から出発し」た彼はカトリシズムへの接近によって「立原の模倣者・追従者である点を危うくまぬかれ」、詩集『司祭館』（昭21・12、手書き私家版）に至って「はじめて立原の追従者たるを脱し」

た（小川和佑、昭44・5審美社刊『立原道造研究』）、といった具合に、立原からの離脱を前置きとし立原との差違という事をその大枠として、論述されることが多い。そこから、二人の近似性——作品の内容は勿論だが共通の〈母胎〉たる『四季』との関わり方も、何となく、類似を想像しやすいのではないか。

しかし、具体的な事実として、例えば立原より三歳年下大正六年生まれの野村の詩が『四季』に発表されたのは十七年六月、第六十六号の「祈禱」が初めてであり、その前の同年三月第六十三号掲載の訳詩「哀歌第五」（フランシス・ジャム）、或いは十六年一月第五十三号掲載の小品文「雉子日記・堀辰雄詩集」まで幅を拡げて考えても（十四年七月第四十七号の立原道造追悼文は作品とはいえない）野村はこの年二十四歳、立原の『四季』初登場時の年令二十歳に比べて、かなり遅い萌芽といわねばなるまい。野村はこの頃から『四季』の編集事務に携わり、実質上の主宰者堀辰雄から編集上の意見を徴されもしていたという（中村真一郎、昭38・5刊筑摩選書『戦

後文学の回想」が、立原が十一年二月第十五号の時点で、以前からの「同人」として確認されているのに対して、野村の方は二次『四季』終刊の十九年六月迄、遂に同人に列するには至らなかった。

しかしこれら野村の〈遅滞〉は直ちに立原との稟質の差に帰せられることではなくて、両者が『四季』に接触して行った、その立場の差違をも考慮せねばならぬようだ。即ち、立原が、『四季』に関わる以前、結果的には『四季』への橋渡しとなった堀辰雄に接触して行ったのは、堀の愛読者乃至広く文学愛好者というに留まらず、明らかに実作者（実作志望者）としてでもあったと思われる。初めて堀の面識を得た時期は明確でないが、昭和八年のノートの「千九百三十三年五月六日の事なりき」と日付を付した「即興詩人」（アンデルセン）読了の記事の、前頁及び前々頁（角川版六卷本全集第六巻編注は二月末の記事と想定）に「堀辰雄氏の持つてゐる本」「堀辰雄氏の忠告」という項目があつて、後者はともかく、和洋書計四十三点を掲げた前者は文通等による知識とは考え難く、恐らく近い時期に、そう短時間ではない堀宅訪問があつた結果であろう。さて、その「忠告」に記し留められた全七項の中、「1、童話的なものに裏打をせよ！（裏側に生活がなければいけない。）」「3、自然にWittyなものだけにたよれば、そこに行き詰りが来る。自然なものの書き方を先づ学ばねばならない。」「7、作品の裏打は読書がしてくれる。」等の、文学受容ではなくて明らかに制作態度についてのアドヴァイスは、当時の立原が何を求めて堀に接して行った（ものと、堀に受けとられていた）かを示唆しよう（但し「2、子供が思ひついたことをしやべる。それはときどき美しい。」と記したのに続けて「僕の

今の詩のままでは、その危険がある。」と具体的警告（？）に転じているのは、堀から〈君の詩は……〉と直言されたと見ると他がすべて一般論・抽象論に止まっている中でや、唐突の感があり、堀の一般論に促がされた立原の自省かと思われる。更に同じノート末尾近く、九月上旬付の記事が続いた後に今度は「堀辰雄氏の批評」として六項目、「将来への注意」として二項目が記されているが、前者はその直ぐ前に

〈夏の死〉／十一月の末に筆をつけ、一月五日に、一先づ仕上げる、思ひ出と現在をモチーフ。持つてゐる絵と待つてゐる絵を手段にする。三六枚（傍点引用者）

と覚え書きした散文物語「夏の死」を、堀が閲読した結果（従つて九年一月以降の記事。角川版六卷本全集第六巻編注で九月の記事に入れているのは右「制作期間」の見落しか）と思われ、全項かなり具体的なプロットについて指摘し助言を与えている。そしてそれを踏まえて「将来への」注意が添えられているのは、この作品に対する評価とは別に、堀が作者の創作への志向を、一時の・一作限りの気紛れとは受取らなかった証左となるう。

そして九年春、第二次『四季』発刊の計画が具体化してゆく同じ時期に、立原は別に親しい友人達との同人誌「偽画」の発刊計画を進める（昭9・6創刊）のだが、誌名も「堀がつけた」（江頭彦造「堀辰雄と立原道造」、『国文学』昭38・7）というこの雑誌への夢を、立原はまだ「やれるかやれないか、わからない」うちから「何だかうれしくて仕方」ない、と（想定昭9・4書簡）堀に告げていた。『四季』への出稿は前にもふれた通り二号からだが、創刊号（昭9・

10) にも、四月頃まだ全くの準備段階で堀から出稿を奨められたかと思われるふしもある。即ち前引『偽画』の計画を語った書簡の前文に「昨日は、いろいろ有難うございました。／結局、原稿は出さないことに決心致しました。」とあるのは、前後の続きや本書簡の時期、また当時未だ無名の立原に外部からの原稿依頼は考え難いこと等から『四季』への出稿(依頼)を辞退したものかと考えられるからだ。その後「自分たちの雑誌」には「僕は、詩を作りたいと思ひます。」(傍点引用者)とあるのは『四季』に「夏の死」のような散文物語を求められ、それが不満で辞退し、あらためて詩への熱意を述べた趣意とも臆測させる。もしそうであれば、堀は最近読まれた「夏の死」——に示されたこの種の作品の資質を、既にかなり評価していた訣であろう。

この点は、野村は対照的であった。十一年夏(十九歳)信濃追分で立原と識り、立原の紹介で堀とも識った野村は、ほゞ同年輩の村真一郎に「堀辰雄や立原道造のまわりにいつもいながら、文学修業をしないで法律をコツコツやっている」「面白い男」と印象される(『野村英夫の詩』、昭44・12刊国文社版野村英夫全集付載。なお加藤周一『羊の歌』(岩波新書)には、信濃追分を舞台に野村と思われる「文学少年」が「法学部の学生を軽蔑」している様を描いているが、筆者の「中学生としての最後の夏」Ⅱ昭和十年の事としたり秋に迫分油屋が焼失する年Ⅱ十二年としたりして、年代的には不正確というよりも全体に虚構があるようだ)。

その野村が、立原の死んだ(昭14・3・29)頃からといわれるが、急に詩作をはじめるやうになつた。(堀『野村英夫詩集』跋、

昭28・7)

いつかフランス・ジャムの詩を訳したり、自分でも詩を書いたりするやうになつた。(堀『Ein Zwei Drei』、昭21・8)という云い方にはその事の〈思いがけなさ〉が感じられようか。

もっとも、「文学修業をしないで……」という印象を与えたその中村に向かつて、野村は「文学は余り若い時にやっても駄目だ。人間的成熟が必要なんだよ」と云っていた(前引『野村英夫の詩』)といひ、十七年秋、即ち『四季』登場後の時点でも、師事していた堀に批評を乞うのは「へもう少しうまくなつてから」と憚つて、これも同年輩の福永武彦に詩稿の添削をさせた(福永『別れの歌』、『近代文学』昭28・9)とも伝える。そうした野村であれば、或いは公然と表明する前に文学志向の潜伏期間があつたかも知れないが、しかし、『四季』の人々に対してもその文学志向が伏せられていたなら結局その間は『四季』にとつて、或いは『四季』に於ては、未だ文学志望者ではなかつた訣でもある。

こうした実情を、後年の回想でなく当時既に反映しているものとして、十四年七月付『四季』立原追悼号での前引野村の追悼文の位置づけが挙げられよう。二十五氏の文を三部に分けた中で、野村の「追悼」は画家深沢紅子や、立原の東大工学部での恩師岸田日出刀・同窓小場晴夫、晩年の愛人水戸部アサイさんらと共にⅡに入れている。他に文学関係の交際範囲では江頭彦造・沢西健ら『偽画』の仲間や高橋幸一・若林つやもここに入っているが、『四季』のメンバーは室生犀星以下三好達治・津村信夫・竹村俊郎・坂本越郎・田中克巳・丸山薫・神保光太郎すべてⅢに収められている。野村は

この追悼号が『四季』初執筆であったがこの扱いはそればかりではなく、野村と堀・立原他『四季』の人々との関わりが結局個人対個人のそれであって、『四季』内部の者とは考えられていなかったことを示すのではないか。因みに、この号の編集は堀であった。

ところで、こうした『四季』に対しての立原と野村の位相差は、似たようなことが堀辰雄個人に対してもあったのではないか。

例えばこういう事がある。立原が、大局的に見れば同体質者としての鐘愛を受けたというべき堀に対して、死の前年、激越な評論「風立ちぬ」（『四季』三十七・三十八・四十二号、昭13・6・12）を以て対決した一時期を持ったことはよく知られているが、その頃立原が滞在中の盛岡から堀に宛てた私信（13・10・19）には通常の師弟愛とは範疇を異にする観のある、愛憎のカオスが見られる。

○あなたの今までのお仕事の意味が、僕をふかくとらへてゐます。どんな仕方ですか？僕はむしろにくしみで！とおこたへしなればならないのです。

○あなたに告白することで僕の心はたやすく涙をながしはじめます。（略）だがこんなに僕の心にぎりぎり苦い涙を——はじめ僕はこの屈辱に出会つたとおもふほどに、いま僕は怒りとかなしみに灼けてゐます。

○あなたにも、僕にも、共通の不完全と醜がある。しかしそこから脱け出さうとしてゐることは正しい。しかし、その不完全と醜とだけでそれにささへられて生きてゐる者がゐたら、あなたはどうかなさるか？あなたはイロニカルな愛し方をする事が出

来る。そしてかつて僕はそのイロニイをまなび得る、あるひはまなぶことに、愛を信じ得た。しかし、はつきりといまは僕はそのイロニイに耐へない。

○僕の仕事（引用者注、評論「風立ちぬ」をさすか？）が無意味だともうおもはれません。こんなところから生きはじめために、それがなかつたら出来ないでせう。こんな仕事のはじめ方は、あなたにもお別れを告げねばならない日かも知れない。

しかし、僕は、あなたの愛を信じてゐる。それがこんな告白を僕にゆるす。あなたから去つて、僕はどこへ行くのだろうか？

○僕が去つたらあなたはどうかなさる？……僕は信じてゐる、あなたの崩壊を。それを信ぜずに、僕はあなたの愛を信じ得ない。

堀の小説「風立ちぬ」を、その世界の静止性・自己閉塞性のゆえに否定する（或いは、より切実な我が身の上の事として）拒む、という立原の同題評論「風立ちぬ」の論理構造に対しては、この書簡は恐らく何も付け加えていないだろう。長々と引用した理由は、その口説のスタイルにある。立原はごく普通の友人等に宛てても絡まりつくような抒情を繰り抜ける傾向があるが、それらと比べてもこの書簡の愛憎の深さ、その起状の激しさは異色といえる（しかも相手は友人ではないのだ）。顰蹙を恐れずにいえば、かりにこれを愛人への口説と偽って（但し文中の「仕事」という単語だけは伏せて）示された場合、果たして何人がその偽りを見破るだろうか。自分は確信を以て見破り得る、という自信が持てぬならば、立原の批判が決して、文学者堀の客観的な（許し難さ）——純粹に文学観の上だけでの許し難さのみによって縷述されたものではなかった、という事情

を素直に想像してみるべきだろう。これと酷似したスタイルの口説を通常想像し得るような人間関係（異性間でも同性間でもよい）に類似する心情を、少なくとも立原の側には想定する方が、この文章の読解としてノオマルではあるまいか。

そして堀に、そうした立原の側の事情を読みとる程度の文章鑑賞力が欠けていたとは考えられないのだが、しかし、この私信に対する返信（その有無は現在明らかでない）はともかく、この私信の心情に支えられている評論「風立ちぬ」に対しての応対も、残されていない。この翌年天折した立原の追悼特集を予告した『四季』四十六号（昭14・5）巻末掲載の「立原道造」で、堀は立原の遺響を、

「優しき歌」と題せられた一聯のソネット、断片若干、一冊の日記、及び友人らへの数多くの美しい手紙を残して死んでいったが、それらによつて立原が今後我々の間に、生前よりも一層独自の流儀で生きるだらう事が我々にとつては唯一の愉しみである。

と総括した。評論「風立ちぬ」に連繫する前引書簡も、〈美しい〉と評して誤りはなからう。従つてこの総括に、どこが誤りとか、何が洩れているとかいうことはない。そして、この総括が〈美しい手紙〉の一つとして言及した（と見て）、それ以外にはいかなる応対もそれとしてはなされずに終る。

だが、応対はしなくとも堀の側にも独自に、内容的には立原書簡のスタイルに照応するといえそうな情景のあったことが伝えられている。阿比留信（豊田泉太郎）は九年（？）晩夏（文脈の上からはそう成る）「二人の詩人（堀と立原）の心」が「次第に深く交わって

行つた」「愛の生成の過程にまつわるいくつかの記憶の断片」の一つを、次のように記す。

その日、堀君は妙に機嫌がわるく淋しそうだった。（略）その日たずねて行つた僕は堀君とその時夕食に牛鍋か何かを喰べようとしていた。そこへ立原君がのっそり入って来た。ちよつと箸を置いた堀君は立原君の顔を見上げるようにして、君も喰うかいと云つた。立原君はしばらくためらっていたが、やがて喰べますと云つてそこに坐りこみ、三人は喰べはじめたが、堀君は妙に黙りこんだような風でゆっくり箸を動かしていた。すると急に立原君は立ち上がつて部屋を出、そのまま階下へ降りて存つた様子だった。堀君はちよつと階下の気配を気にしている風だったが、急にうす笑いを浮べると、あがつて来ないうちに食べちまおうと云つて珍しくせかせかと箸を動かしはじめた。何かちよつと興奮しているようだった。（略）その時の堀君の様子はたしかに特異だったので、何か僕はたずねようかと思ひながら遂に黙つたままでいたが、その後しばらくの間そのことが気にかかつていたことをおぼえている。（「一枚の絵ハガキ」、『文芸』昭32・2臨時増刊堀辰雄読本）

阿比留氏はこの場面について、「堀君の心は、ある時はこの若い魂を愛撫するかのやうに近く、またある時は遠くから冷たくこの若い詩人の心情を見つめているかのやう」だったと（これは恐らく後者の例か）説明しているが、それを更に「時に厳しく時に優しく年少者を導いた、堀の人間的な幅の広さ」などといひ替える意味は如何に平和と福祉の時代でも避けたいものである。どこかの家庭の夫婦喧

嘩の直後に訪れた客も阿比留氏と同じ思いを抱いたろう——と云ったら、怒りを買うか、蔑まれるか？

いまま少し硬派（？）の形をとって表わされた例を挙げれば、立原歿後その「遺稿を出すために」杉浦明平氏が堀を訪宅した際、（前後のいきさつがや、曖昧なのだが）

詩集の編集にうつると、立原が寄贈するつもりで、献呈の辞を書いたが、途中で気がかわって残して行つたあの楽譜型の詩集『萱草に寄す』『暁と夕の詩』をば（堀が——引用者注）ビリビリと裂いてしまった。

という（杉浦「堀さんと立原と」、新潮社版七巻本堀辰雄全集月報5号）。喜怒悲喜という感情の表現と解すべきなのか、杉浦氏はどう解したのかも同文では不明だが、氏らが「じぶんの皮膚が裂かれるような痛ましい目なざしで堀さんの手もとを眺めていた」という反応から推して、例えば立原の詩業に対する不満・否定といった単純明快なことではなかったと考えるべきだろう。

こうした立原との交渉に比べて、後年野村英夫が堀のカトリシズム理解について不満を申し立てた時の堀の応対は、まさに情理兼ね具えた温顔の師のそれだった。戦後昭和二十一年五月、『花あしび』（昭21・3青磁社刊）に収めた「十月」（初出『婦人公論』昭18・1、2）で堀が挿話的に触れた「クロオデルの『マリアへのお告げ』」の扱い（十月十九日、二十三日付の個所）に対して、野村は

何か不平を申し上げたうございました あのマリアのお告げはどうしても唯絶対者への全き帰依とキリスト教的な犠牲の美しさを描いたもので造型的な偶像芸術の美とは全く入れないもの

のやうな気が致してをります

と書き送る（21・5・14消印）。野村は更に二十三日消印の書簡で、前便での誤読を詫びつ、根本的にはカトリシズムについての自説の受け入れを迫るのだが、野村の側の節度ある（その方が当然なのだが、立原と比べて）口調もさること乍ら、二通の書簡をまとめてなされた堀の応対は

僕の「聖書」や（略）クロードルに対する考へは、全く僕の天涯孤独の文学上の立場からなされるもので、クリスチアニズムといふものは勘定に入れてゐない（略）だから、その側から見ると随分乱暴なことをいつてゐるだらうとおもふ

と、まず会釈したのち、具体的に「十月」での扱いについては「マリアへのお告げ」のヴィオレエヌの犠牲の崇高さに感動しながら、同時に何か心情的にそれに反撥せずにならなかつたのは、あゝいふ僕の十月的な心境のなかでの一つの挿話であるにすぎぬ、（21・6・2付書簡）

として、宗教と文学と、自他の立場の両立を図る。文学上の問題としては「あそこだけを切り離して見ず、『十月』全部を考へて」「僕（堀）の反撥」を「理解」すべきだ、と、〈師〉として教諭することとは怠っていないが、同時に相手の心情も十分に斟酌して、所謂醇々と説いて相手を傷つけることなく納得させようとする。

ここで堀の温容を云うも宜し、又そうしてまで説得を放棄しない〈師〉としての熱意を賞揚するもよいが、いずれを云うにしても前述立原の批判（乃至訴求）への対応（正しくは無対応）との格差は歴然としている。しかしこれを、堀が立原に対しては冷淡に、野村

には望みを嘱していた為——といった軽重差と考えるのは、これ以外の数多の材料を無視した強弁といわざるを得ない。一つには野村の提起したのがカトリシズムの解釈という、非信者堀にとってはいわずば知識の問題だったのに対して、立原は堀の文学観というよりむしろ人生観を糾したという、問題の大小、教え論せる問題と然らざるとの差もあつたろう。また一つには、そういう問題を突きつけて来た立原自身が、既に「教え・諭す」べき師弟という上下関係・上下差を詰め、越えて、互いの考えの違ひは「どうしようもない」等位同格の関係として感じられていた——ということはないだろうか。

或いはその他に、立原に対し昭和十三年と野村に対し二十一年との間の、堀自身の「成熟」も考慮すべきかも知れないが、一方では相手の野村も、十三年当時二十四歳の立原を五年越えて既に二十九歳であつた。片方が典型的な「年少者」としての扱いをうけ他は然らざること、不均衡感是否めないのである。そこで、差違の明瞭な二人の扱い方のいずれがノオマルなそれだったかという問題になれば、多分野村の方であり、立原の方が異常だったということになるかと思う（二人の方からの堀への対し方についても同様である）。しかしそれを云いかえれば、立原は「異常に」堀の内部深くに在り、野村は「正常」な距離を隔てて位置した、ということでもある。

第二次『四季』の前半期と重なり合う立原に対して、野村の詩人としての存在はむしろ戦後にあつたというべきだろう。野村の作品

発表歴として現在最も完備していると思われる猿渡重達「野村英夫」付載年譜に拠れば、野村の詩の雑誌等掲載数は敗戦前七篇（すべて第二次『四季』）、戦後は二十三年十一月死歿する迄に十九篇（うち第三次『四季』には六篇）に達する。あけすけにいえば戦前の野村には『四季』以外の発表の場は無かつたかと思われ、同人誌詩人から脱皮しつゝ、あつた戦後に限れば『四季』掲載詩は三分の一弱である。立原生前の雑誌等発表詩八十八篇、うち『四季』掲載四十一篇（六巻本全集第一巻編注に拠る）約四割六分という高率との差は、戦後の第三次『四季』の不定期刊行（昭21・8、9、11、22・4、12）の挙句の短命という、野村本人には責任のない（単独編集を目ざした堀を扶けるべき野村としては責任が全くないとも云えまいが、まあ）相手方の事情も大きく与つていよう。

『四季』の時代と個人の生涯との時間的ずれは、津村信夫の場合も、野村以上に大きかつた。第二次『四季』創刊以前に既に商業誌にも発表していた津村の場合は、生前の雑誌等掲載詩総数二百二十八篇、うち『四季』には三十六篇、約一割六分に過ぎない。『四季』から見ても重要度、『四季』への貢献度は立原との甲乙を軽々に云えまいが、津村の方からいえば『四季』だけに寄り縋つてなどいなかったということである。だから立原に比べての野村の低率も詩人としてのトータルな評価に直接繋がる材料でなどありはしないのだが、それを承知の上で文学史上の事実として「『四季』の」詩人なる称を用いるとすれば先ず立原を指して云うべく、そこに野村を加えようとすると語の意味が些か変化することを弁えねばなるまい。

II

戦後間もない頃堀は、中村真一郎・福永武彦に野村を並べて三つの若い文学の芽へのつましい祝福を述べた「Ein Zwei Drei」（『高原』第一輯、昭21・8）に

（野村を）死んだ立原道造なども弟のやうにかはいがつてゐたものだ。が、この少年、おとなしさうに見えて、なかなかの強情っぱりで、それには立原もよく手こずり、「このごろ野村君は、堀さんのいふことなら何んでもきくが、僕のいふことなんぞきいてくれなくなつた」と、さも不平さうにしてゐた。

と書いた。いうまでもないが此処にいう立原の「不平」は「僕のいふこと」も本来は「へきいてくれる」筈という親密感——平たくいえば心安さと、それを育てたところの、実際「へきいてくれた」年月の存在が前提となっている。そもその話は、たちを越えた（野村は昭和十二年に二十歳）青年が三つ年上の先輩の「いふこと」を素直にきく方が珍しく、そうならぬと云って口惜しがる立原と、それを期待される種を蒔いた野村と、双方の微笑まじさがこの文のモチーフであらう。

そうした両者の関係の例外的な一時期（ともいへぬ程の短期間だが）として、十三年十月、当時盛岡の深沢紅子縁辺宅に滞在していた立原を野村が訪れた折の心理的葛藤が、しばしば立原論・野村論の一要素として取上げられる。

この盛岡行自体が立原晩年の世界に対して持った意味については、時に論者自身の持ち出しを疑わせる迄に掘り下げられ力説され

ているが、立原自身の表現を以て要約すれば追分で彼が知り「何よりも信じ」ていた「不毛の美しさといふこと」の、反対概念としての「Fruchtbarkeitの美しさといふものをはじめて学」び（遺稿「盛岡ノート」）、「やうやく新しく生きられるやうな確信をきづきつあ」つた（昭13・10・11橋宗利宛書簡）。ところが、九月十九日盛岡到着（9・21消印立原光子・達夫宛書簡による）以来「孤独のなかで完全な忘却のなかでしづかな世界をきづいて」いた（10・6消印小場晴夫宛）彼の許へ、月末（注4）（？）東京から野村が、また十月七日（注5）弘前から小山正孝がやって来る。小山の方は僅かの滞在で再び弘前に戻るが、その後十五日まで（六巻本立原全集年譜）共同生活をおくることになつた野村の存在は、抽象的には「僕の想念のなかにしのびこんで 妨げるやうにうるさく羽をふるは」せながら「自分が何であるかについておそろしく無知であり 従つて無恥」な、「あはれな光の蛇」と扱えられ（前引小場宛書簡）、具体的には「無恥な顔で粗暴に梨を食べてゐる」相貌を憎さげに描写される（盛岡ノート）。だがこれらをもつて野村の客観的な非や人間的欠陥に帰するのは軽率であるようだ。のち、立原歿後の十六年十月、全集（山本書店版三巻本）編纂の為遺稿整理にあたつた野村が前引ノートを讀んで、その衝撃を堀に訴えた際、堀は

あのととき君が悪かつたのではない、立原だつて悪かつたのではない、ただあのととき互に孤独であるべきものが誤つて一しよにゐた事が悪かつただけなのだ いまから考へると、ただ君のまぢがひは、あのととき一人であることに我慢できずに立原のところまでいつたのがいけなかつた、又立原も一人きりでゐなかつ

たのなら、最初の日に君を拒まなかつた気弱さを自分に許したのがいけなかつたのだ、

と解析し、堀自らの同ノート読後の印象を

あそこで立原が君に与へられたと信じてゐた傷手が、それが君といふ具象的な相手からでなく、現実そのものから与へられたものとして考へられて、僕にはそこに君の具象的な姿がなく、

ただそのあとに残つた立原の傷だけしか思ひ出せなかつた、

と述べた(昭16・10・20付野村宛書簡)。

堀に苦衷を訴えた野村の書簡自体は現在伝えられていないが、「あれ(立原のノート)をはじめて君が読んで驚いたこと」が「僕にはよく分かる」といった堀の応対から推して、恐らく野村は、当時多少の気まずさ(が、相手にあるらしいこと)程度は感じたとしても、それ以上の立原の「にくしみ」(ノート)や「野村君とは十月のなかに喧嘩してそれきりになつた」(11・11小山正孝宛書簡)と後に尾を曳く袂別感の想像もしていなかつたのであろう。ということは、恐らく野村にとっては何でも無い無事平穏の日々だったのであり、とすれば、立原のノートから受けた「衝撃」は訴えても、その源である三年前の秋の日々の「事実」は、野村の印象には無く従つて堀への書簡にも野村の立場からの復元はし得ていなかつたことと思われる。そこで前引堀の推察と照合すべきものは当の立原の側の記録だけとなるのだが、じつはその盛岡ノートや当時の書簡に、堀の理解に照応する点が無いではない。例えば

①彼(野村)を無視することで 彼を隔てられはしまいか しか
も 彼はつねに 外部と僕との間にその顔をはさむ あたかも

虫歯のなかに 腐肉があるやうに そして僕の眼は 彼の萎へた横顔のあちらに 僕の愛する風景を見る

②Nはかへつて行つた(略)あの別離が行はれてから 僕たちには また平和が かへつて優しさがかへつて来たのだ しかし ふたたびは もとにはもどり得ない 彼の奪つたものも 僕の奪つたものも 互にあまり多すぎる

③僕はちひさな病ひをさへ持つてゐる Nのかはりに あるひは Nは僕の病ひではなかつたらうか (以上、ノート)

④(あはれな光の蛇!)僕はそれをにくむ しかし それなしには僕のかんがへは 人間をやがて人間の愛を忘れてしまふだらう 僕はいま君へのこの手紙も その蛇の妨げと協力とによつて書く

⑤(ここの町に来て二週間僕は孤独のなかで完全な忘却のなかでしづかな世界をきづいて行つた)きづくといふ意味がこれほど純粹に僕にとつてみだされるとは嘗て夢みられなかつた仕方であり 否! もし僕がきづき得たらうか 透明な微妙な光のなかになにもたやすくそれはくづれ落ちはしなかつたらう

(以上、10・6消印小場宛書簡)

①の「彼はつねに 外部と僕との間にその顔をはさむ」ことと、④の「それなしに」は「人間を……忘れてしまふだらう」というのを組み合わせれば、「彼」が「顔をはさむ」のは偶然でも過誤でもなかつたことが察せられよう。「彼」は立原の思索が「人間」不在の、現実乃至現実生活での対象を消去した非現実の自閉的世界のものと

なり了せることを妨げたのであり、いったん（「この町に来て二週間」は消去した「現実」の復辟運動の先鋒として立原の前に現れたともいえよう。勿論立原の非現実の想念の世界の、価値——当時の立原にとっての必要性といった事は又別の問題だが、しかしそれが現実と対峙し得る迄に確固としたものでなかったことを、⑤の後半が示している。それを立原に悟らしめたという意味では、野村の来盛は当時の立原に対して、客観的には寧ろ適切有効な諷諫の役割を果たしたともいえるのではないか。

③の「ちひさな病」というのは、佐藤実氏『立原道造』（昭48・10 教育出版センター刊）収「盛岡ノート」の考察によれば痔瘻をさしているようで、それと類比したのは少々残酷だが、野村の与えた障害或いは野村が障害となったことを「我が内なる病まい——自分の志向に対して障害であることは間違いなくとも外からふりかかったものではなく、自らの現状に伴なって自らの内に生じ来たもの——と観ずる視点があつた訣だろう。②で加害者としての自己をも想定しているのは具体的にどのような事をさしているのか不明だが、自己の激情を相対化し事態を客観視する視点もあつたことを示唆していよう。

ところで、立原にとってトラブルだったことは野村には意外でも、盛岡滞在中のたのしさは十分印象に残つたようで、『四季』十四年七月号の「追悼」はその殆んどを盛岡の思い出で埋めている。即ち

立原さんとは、幾度か一緒に暮したりしたけれど、そんな思ひ出では、去年の秋、暫く盛岡で一緒に暮したのが、最後のものになつてしまいました。

と書き出して（確かに最後には違いないが、その夏にも信濃追分で約三週間一緒だった筈である）六百字弱の盛岡の記憶を綴つた後に「僕は追分でも幾度も立原さんと一緒にゐましたけれど」と追分での立原「百字余りを（但しこちらは年次不特定で）付け加えて終っている。野村に追悼文の執筆を依頼した堀の書簡（14・5・23付）には「君も、何か——追分などの事でも——四五枚書けたら」とあつて、それに応じた野村文が盛岡の事を主に追分を付け足しにしているのは野村の強い主体的選択の結果ということになる。もつともそこに綴られた盛岡の印象は、さきにも触れたが立原の「盛岡ノート」での野村滞在期間のそれとはかなりのずれがある。野村の回想は町の風物や立原と出歩いた先々、立原の行住といった外面的な事柄に尽きており、自分のためのノートと不特定読者に向けての故人追懐との差を考えに入れても、これだけくいちがう印象を残した（関心が異なっていた）二人の間では一方には不満があり他方はそれに気付きもしないという状況があつても当然、という氣もする。

この追悼文の後、野村が立原について誌した文章は二点ある。十六年一月発表（『四季』五十三号）の「堀辰雄詩集」と、戦後の「雲・花・小鳥」（『詩人』三号・六号、昭22・4、11）である。後者は立原や津村信夫存命の頃の信濃追分での『四季』の詩人達の姿を、堀を中心に回想したもので、立原はその中の一人というにとどまるが、前者は堀の若年の詩を立原がまとめた手書きの同名詩集を、立原の死後堀が深沢紅子の挿絵を入れて活字化した（註6）（昭15・10刊）、その作業が進んでゆく途中の諸情景を描いたもので、全体の約三分の二は深沢の挿絵制作に割かれているが立原もそのきっかけを作った、

いわば第一の脇役である。ところが一つ奇妙なのは、この小品文では

深沢さんにお見せして、……描いて戴いた（お国のお父様がおなくなりになつたり）

堀さんは……お仕事のため……行つておいでになり……上京なさつて

という具合に、少々くどい程の敬語が用いられている（これは野村の一般的スタイルだが）中で、立原のみが

立原君はあんなに不意に、僕たちのそばから居なくなつてしまつた。

という書き出し以下、「君」づけで通され、動作にも全く敬語が無い。深沢・堀と立原との年令差（野村との近き）などでは片付けられないのであつて、前引「追悼」では

立原さん……連れて行つて下さつたり、……読んで居られた。

……探してゐらした、……送つて下さつて、……云つてゐらつした。……立たれた

であり、又後年の「雲・花・小鳥」でも再び

立原さんにお逢ひした……言はれた。……とお聞きすると、……おつしやつた。……連れて行つて下さつた。……居らつした……持つて来ていらつした。……して下さつた

と、「さん」付け・敬語叙述に戻る。もっとも「雲・花・小鳥」では津村信夫・堀・中原中也・室生犀星・三好達治・神保光太郎・田中克巳・丸岡明らすべての登場人物が一樣に敬語表現されており、例えば中原中也のように野村との親疎（師事・兄事の有無濃淡）から

いえば必ずしも適當とは思えない（^年）相手までそうなので、立原もとくに意識的に礼遇されていることにはならない。しかし「堀辰雄詩集」の場合は逆に立原だけが特に、そして一年半前の「追悼」と変わつて、無敬語になっている。ここには極めて明確な非礼遇意識があるう。

何がこの、「堀辰雄詩集」限りの立原への待遇意識をもたらしたのか。

とつさに思い合わせ易いのは盛岡ノートでの扱いに対する憤懣・しつぺ返しという事かと思うが、盛岡ノートの記述を野村が知るのは「堀辰雄詩集」発表（昭16・1）の九カ月後、生憎ながら順序が逆である。それに憤懣・しつぺ返しといった積極的悪意と見るには、語法上敬語こそ無けれ、内容的には決して悪意ある扱いではない。「僕たちはまだ、立原君はほんの今暫しの間だけ」「天国美術館かなんかの設計のため」目の前から消えたのだと思つてゐる、といった愛惜は、敬意とはいえなくとも好意的とははつきり云えよう。

つまり、「堀辰雄詩集」で——立原の死から二年足らずの文章で、野村は立原を、先輩としての敬意から仲間としての好意の対象へと切り換えたのである。もつとはつきり、へ引き下げた^とと云つてもよいが、しかしそれ以上の敵視や蔑視への変化ではない。そしてそれは、これといった事件によるものではなく、野村の内部で、おのずと生じて来た変化なのだ。意地悪く云いかえれば、相手が死んでしまえば特に何事も無くてもその程度の変化は生ずるような、そういう内面状況を抱いて野村は生前の立原と交わつていた訣である。

その後、野村は盛岡ノートを読む。堀の慰留を経て、結局「野村

君自身に、その箇所を消させようということになり「誰かが浄書した（略）原稿は、野村君によって、ところどころすみ黒々と消され、それがこの折の山本書店版全集収録本文となった（小山正孝）思ひ出」、新潮社版七巻本堀辰雄全集月報4号）由だが、堀が「たぐさん消したね」と笑ったという（同）程の削除を施した（そしてしかし、その上で公刊を了承した）野村が、自身の削除行為も含めてこの事の総体を自らの内にどう定着させ、或いは溶解させて行つたかは明らかではない。しかし、盛岡ノート閲読体験後の野村は対人関係で好悪の情を抑える（抑える事を心がける？）ようになった、とする中村真一郎の回想があり（「道造さんと私」、昭43・10中央公論社刊『日本の詩歌』二十四巻付録）、十八年四月東京高田寺教会で受洗した野村のカトリック体験ということも、考えに入れるべきだろう。二十二年の野村は既に盛岡ノートの立原を恕しておりその結果が「雲・花・小鳥」の一視同仁的敬語表現に立原も洩れないということになった——のであろうか。

だが、盛岡ノートで立原から受けた扱い、例えば「蛇」に比喻した侮辱を恕す恕さぬということと、「蛇」に比喻した事実認識の正誤ということとは、問題が別である。前者に関しては前引中村の伝える「些細な事から激怒して去った野村が、のち自分から再び交わりを求めてきた」という事例から、立原に対しても寛容——への志向——を類推してよいとしても、後者「正・誤」の判定については、野村は戦後も決して寛大になつてはいらず、むしろ自説の固執癖があったかと考えさせる例がある。前章に引いた堀辰雄のカトリシズム観への食い下がりもそうだし、又『四季』に於て立原の更に一段

上の兄貴格であつた津村信夫の晩年の境地については

きつと堀さんにお叱りを受けるだらうと思ひ僕自身も一寸つかつたのですが一度誰か、書かねばならないことのやうな気が致し

たから（昭22・1・1付堀宛書簡）、と、大義親を滅すといった風な思ひ入れで「山の妖怪」（『午前』一卷五号、昭21・11）を発表、更に「津村信夫論ノート」（歿後『三田文学』昭24・2掲載）を遺した。この二つの否定的津村論は、しかし論旨としては既に津村生前の十八年二月、『四季』七十二号の特集「詩集研究」（津村信夫論）に寄せた「孔雀の羽で」で示唆はしたものであつて、改めて「誰か、書かねば」という程の新見とは云い難い。掲載誌も又、前稿掲載誌に比べて、この機をとらえてと意気込むようなものでもない。しかも相手の津村はすでに亡い（昭19歿）のだ。只「孔雀……」は津村の初期の詩風からの変化に対する不満を

○僕は今日は貴下の新詩集「父のゐる庭」の事を何か話さなければなりません。がそれはなんと悲しい事でせう。

○僕は貴下の旧詩集「愛する神の歌」を読み返して見ませう。がこれは何んと又僕には懐しい詩集でせう。

○あの「愛する神の歌」の詩人は、今は静に、「父のゐる庭」の中で歌つてゐます。あの日のやうな誇りや、驚きや、遠い国への憧れからは今は何か次第に遠く。

といった甚だ控え目な形でしか示していない。それが心残りだったから再説するというなら気持は判るが、それなら前回の怯懦（少なくとも訥弁）を悔いて「もう一度書かねば……」と理由づけるべく、

「誰か、書かねば……」と他に人なき故の如く云っては詐術に近くなるう。

野村が意識して自他を偽ったとは思いたくないが、事、認識の正誤に関してはや、執拗なまでに論じ尽くしたのが戦後の野村だった。その野村が、かつての盛岡での立原の内親生活に対する自己の位相について、立原の余りにも明確に示された認識の正誤を不問に付した儘恕す恕さぬという次元に流し去るのは似つかわしくないのである。勿論、全体に人懐しげな回想記「雲・花・小鳥」では津村に対しても肩を怒らせた論議はしていないが、立原については「山の妖怪」のような正面切った論が別になされてはいないのだ。なぜ、そうなったのか？

いま一つの不審は、かつて盛岡ノートに対して抱いた不快乃至憤懣がノートの削除という形で、相手の遺業の公刊を歪めていることの決着に関してである。相手の文章を削除した段階で野村は、〈被害〉はその儘、一方では加害者と成った筈である。かりにも文筆の徒と自認するなら、その事に不念だったという言い抜けは通るまい。とすれば、「雲・花・小鳥」で野村は立原を、黙つて、へ一視同仁に「待遇してはならなかったのではないか。かつて謗られ傷つけられた怨みについては恕せたならそれで宜し、恕せなくても黙して過ぎてよからうが、その後の〈加害〉については、——もしも正当な削除だった、立原の犯した過誤を拭い消したのだと確信していても、その相手の過誤を伏せて適当に待遇するなら却て矯慢というものだろう。戦後の野村を宗教者と取り做そうとなら、尚更である（削除を不当だったと考え直したのなら、云う迄もない）。

だが野村はそれを省いた。故人の非を云うことは只管恐れるといった野村でもなく、また逆に一時の不明を詫げるのが不名誉な相手とも思えないのに、である。そこに野村の立原に対する、屈折した一種負け犬的心理を感じては酷であろうか。

注1 立原と堀の交渉は昭和六年末迄は溯り得る。七年一月一日付堀の立原への年賀状に

この頃は太抵起きてゐるから遊びに來たまへ

とあり、それ迄に最低一回は立原からの接触（訪問か、訪問可否の打診か）があつて、それへの応対と思われる。これを受けて立原が直ちに訪宅したかどうかは不明だが同年八月末には留守宅（堀は軽井沢滞在中）をたずねた（想定8・28発信堀宛書簡）ことが知られている。

2 項目番号は10迄あるが、8以下は番号のみで本文を欠く。

3 この自作についての覚え書きの部分は角川版五巻本全集第一巻では採取を略されている。六巻本六巻で初採取。

4 10・4 消印杉山美都枝宛書簡に「一夜野村君が來」①「ここ二日は雨」だったが②「きのふは町に行つて活動写真を見」た（傍点引用者、以下同）とあるのを、佐藤実氏は①について盛岡地方気象台の記録をもとに十月二・三日と推定、②については野村の立原追悼文（『四季』四十七号）に盛岡では立原と「町の活動小屋で巴里祭を見たり」とあるにより、フランス映画「巴里祭」の上映日を当時の盛岡市内の映画館のプログラムで検索、九月二十九日から十月二日迄と確認した（昭48・10教育出版センター刊『立

原道造」。氏の推論では①右書簡が書かれた日は雨天の十月二・三日の二日目、②前日はまだ「巴里祭」の上映期間内即ち十月二日以前、従って野村が来盛した「一昨夜」とは十月一日夜となる。しかし別に十月一日消印の生田勉宛書簡には「ゆふべ野村君がやつて来」たとあり、こちらに依れば九月三十日（投函＝消印は実際の書かれた日以後、だから正確には三十日以前）来盛となる。未詳、としておく。

5 六巻本立原全集年譜には七日来盛・九日弘前に帰ったとし、10・14小山宛立原書簡に「あれからまた一週間の日がすぎた」とあるのはこれと符合する。しかし一方立原の遺稿ノートいわゆる「盛岡ノート」に「三人になつて、僕らはうまくくらせなかつた。そのころから N（野村）とのあひだにかすかな裂目がはひつたのだらうか」とあるが、野村への不快感は既に前引十月六日消印の小場宛書簡にかなり強烈に記されており、こちらと整合させるには小山が来盛し三人になつたのは遅くとも五日と見たい（但し前引10・4消印杉山宛書簡には野村が来盛「いまはふたりで」くらしているとあり、余り溯ることはあり得ない）。これ又未確定としておく。

6 この詩集の「原本」については立原が深沢のアトリエに置き忘れて（わざと？）行つたのを、立原の死後「深沢から渡された」という堀の解説（15・10刊山本書店版『堀辰雄詩集』付載「著者の言葉」）が広く知られているが、深沢によれば立原の死後野村に与えたのが「堀の耳に入つたの

か、回り回って堀の手に渡ったのか」、刊行の話が出た、という（絵のある詩集」、新潮社版七巻本堀辰雄全集月報2号）。深沢文も後年の回想（昭29・5刊）だから一概に「堀的なフィクション」による「文学化」（小川和佑、昭53・6六興出版刊『評伝堀辰雄』）とも決し難いが、当の（？）野村が「堀辰雄詩集」の中で「……深沢さんのアトリエの隅の机の上に置かれてあつたのだつた。」から飛んで「堀さんは今度、深沢さんに絵を描いて戴いて、いつか立原君の作つた様な、堀辰雄詩集をお出しになると、僕にお話しになつた。」とつなげ、原本が深沢から誰の手に渡されたかについて全く触れていない不自然さは、自分の知っている事実（譲り受けた本人なら）と既に発表されてしまった堀のフィクションとの板挟みになつた結果と見れば納得が行くうか。

7 中也是第一次「四季」にも第二冊に、二次「四季」には創刊号から寄稿し、十一年二月には同人に列せられるが、「四季」生え抜きの仲間だったというのではない「せいか」「四季」の集まりなどあつても、ほとんど出てこなかつた」（昭42・12読売新聞社刊『日本の近代詩』収、丸山薫「三好達治と中原中也」ともいう。また肝心の野村の方が、十一年八月立原・堀を識つたのを「四季」への接触と見ても翌年十月には中也が世を去る。△「四季」を媒として△の関係、とも、謂えるかどうか。

8 但しその時期については、当事者の一方である中村の回

想では十四年夏とする（「道造さんと私」）が、絶交事件の折、折井沢の森達郎の別荘に居合せたという福永武彦は十七年夏のこととしている（「追分日記抄」、『新潮』昭28・10）。猶、存疑。

（昭56・1・10稿）